2014 年 3 月 27 日放送

「第 31 回日本美容皮膚科学会①　大会を終えて」

大阪医科大学　皮膚科
教授　森脇　真一

はじめに

第 31 回日本美容皮膚科学会総会・学術大会を、昨年平成 25 年８月 10 日、11 日の両日、兵庫県の神戸国際会議場にて大阪医科大学皮膚科を主幹として開催させていただきました。

30 年という本大会の歴史の中で、関西では第 23 回大会の京都、第 26 回大会の大阪に次いで３回目、神戸では初めての開催になります。

学会期間中は、午後６時でも気温が 36 度を上回るという猛暑のなか、２日間にわたり、美容皮膚科医療に携わる全国の専門家（主として皮膚科医、形成外科医）が集まり、美容皮膚科学に関する臨床的、基礎的研究成果の発表、美容医療についての新技術の紹介、活発な質疑応答、意見交換がなされました。

今回、登録参加者は 932 名、その他展示などの企業関係者が 373 名、総計 1305 名が神戸に集まりました。

学会のプログラム構成について

本大会のプログラムには特別講演２、招聘講演１、シンポジウム３の合計 12 演題。さらに教育講演３（６演題)、一般演題 56、さらにはスポンサー共催セミナーとして、ランチョン６、イブニング３、スポンサードセミナー３、そして企業展示が 51 社 68 ブース、ハンズオンセミナー５社などを盛り込ませていただきました。

学会テーマについて

美容皮膚科学の領域では、毎年新しい機器や技術が開発され、手技に関する新たな知見も蓄積しており、近年の進歩は著しいものがあります。また、社会での美容皮膚科学に関する認識やニーズが高まり本学会は今まさに成熟期に入ったと言えます。

そこで今回、成熟期に入った日本美容皮膚科学会の学術大会を開催するに当たり、「もう一度学問として、社会のための美容皮膚科学を考えてみよう」という原点に立ち返って、テーマを「この肌と生きる～分子から心まで～」とさせていただきました。そして、以下の３点を大会のコンセプトに取り入れました。

１．美容皮膚科学をサイエンスとして考察する。
２．日々進歩する美容皮膚科学領域の手技、機器などの最新の知見を提供する。
３．医師のみならず、美容医療に携わるパラメディカルのスタッフ全てが知っておくべき美容と心の問題を取り上げる。
の以上３点です。

大会の流れとしては、初日午前は主として基礎、研究セッション、初日午後から２日目午前にかけては臨床と実践セッション、２日目の午後は心の問題を取り上げるようにプログラムを作成しました。

基礎のセッションより

まず、最初は基礎のセッションである特別講演Ⅰから始ましたが、当初は土曜午前ということで、参加者は少ないと想定しておりましたが、一番大きな会場がほぼ満席だったことに驚かされました。

特別講演Ⅰは、長崎大学准教授の荻 朋男先生に、「紫外線高感受性症候群～ＵＶＳＳＡ遺伝子の発見と病態解析」というテーマでご講演いただきました。

紫外線高感受性症候群（UV sensitive syndrome:UVSS と略す）は、近年新たに提唱された遺伝性疾患、遺伝性光線過敏症です。軽度の光線過敏症に加えて、そばかすのようなしみができます。これは、DNA 修復の異常だとわかっておりますが、荻先生のグループは、新たに新規の遺伝子として、UVSSA（別名 KIAA1530）を発見されました。一昨年のことでしたが、しみ、そばかすの遺伝子がわかったということで、当初はマスコミでも話題になった素晴らしい業績です。

UVSSA の機能としては、転写共益ＤＮＡ修復と言う、DNA 修復にかかわる因子であったわけですが、今後はしみ、そばかすのメカニズムの解明が急速に進むのではないかと期待しております。

続きまして行われた教育講演Ⅰ、Ⅱでは、分子、細胞の観点から、サイエンスとして美

容皮膚科学を論じていただきました。

最初の演者はカネボウ化粧品の高橋 慶人先生で、「DNA からみた美容皮膚科学」。

２つ目の演題は、琉球大学皮膚科准教授の高橋 健造先生により、「表皮からみた美容皮膚科学」を論じていただきました。

さらに、東京工科大学教授の芋川 玄爾先生に「メラニンからみた美容皮膚科学」を話していただき、最後に、ポーラ化成工業株式会社の五味 貴優先生に、「真皮からみた美容皮膚科学」に関してお話しいただきました。

臨床・実践セッションより

初日午後からは臨床と実践セッションになりました。

最初は、美容皮膚科学を始めようと思っている医師に対しまして、主として若いエキスパートの先生方にお願いして、美容皮膚科医療の入門編として、シンポジウムⅠを企画しました。テーマは、「明日から始める美容皮膚科診療」です。

最初は、神戸百年記念病院皮膚科・美容皮膚科部長の長濱 通子先生に、「レーザーを使いこなそう」としてレーザー治療の基本的なことを話していただきました。

続きまして、和歌山医科大学皮膚科講師の上中 智香子先生には「ケミカルピーリング」を、３番目には、順天堂大学浦安病院皮膚科助教の竹内 かおり先生に、「フィラー注入、ボツリヌス療法を始める前に」というテーマでお話をいただきました。最後は、近畿大学奈良病院教授の山田 秀和先生に、光治療ということで、くすみ、しわ、たるみの話をしていただきました。

特別講演Ⅱは、大阪大学大学院美容医療講座教授 高田 章好先生に、「美しさの基準とは」というテーマで、美容外科医から見た女性の顔の美の基準を話していただきました。

お話の中で興味深かったことは、美しい女性の顔というのは、当然、個人的な好みや心理的な側面もありますが、計測データも大事です。目と鼻の距離が顔の 36%、両目の間隔は顔の幅の 46%が一番美人だということを話されていました。

２日目午前中は、美容皮膚科診療の上級者コースです。

シンポジウムⅡは「エキスパートに学ぶ美容皮膚科診療」ということで、最初は「シミ治療最前線」というテーマで、大阪市の葛西形成外科院長の葛西 健一郎先生に、続いて虎の門病院皮膚科部長 林 伸和先生に「ニキビ治療最前線」、３つ目は順天堂大学浦安病院皮膚科教授の須賀 康先生に「シワ治療の最前線」というテーマで話をしていただきました。

最後は、美容皮膚科の総括として、大阪市のおおたクリニック院長 太田 正佳先生に美容皮膚科学医療の総括として、「美容皮膚科を俯瞰する」というテーマで話をいただきました。

最後に、２日目の午後のセッションでは、「美容皮膚科と心」という問題を取り上げました。これは、本大会で私が最も取り上げたかったテーマでもあります。

まず、今回のスペシャルゲスト、女優の夏樹 陽子さんによる「私の肌とライフスタイル」

という演題で、肌を美しく保つための秘訣に関してのすばらしいトークと歌の披露をいただいた後に、シンポジウムⅢ「心と美容皮膚科学～心の健康から皮膚の健康へ」と言うテーマで４名の先生にお話をしていただきました。

最初は「メディカルメイクアップ」について京都大学皮膚科講師の谷岡 未樹先生に、２つ目の演題としては大阪医科大学看護学部講師のカルデナス 暁東先生に「スキンケアとメイクセラピーの融合」ということで、アトピーやニキビの方に対する手段として、美容の意識を高めて、生活の質を上げていただく手段としての、スキンケアとメイクの融合的なアプローチに関しての実際を話していただきました。

次いで、東京の銀座スキンクリニック院長 坪内 利江子先生に、「内からキレイになる美容皮膚科」として、食事、サプリメント、ホルモン治療に関する話をいただきました。

最後はカネボウ化粧品 猿渡 敬志先生に、「化粧する脳」というタイトルで話をしていただきました。猿渡先生はサイココスメトロジーという概念を提唱され、脳科学を通じて美しくいることや、化粧の意義を研究されている研究者です。

一般演題などについて

そのほかに、一般演題を 56 いただきました。全てポスターセッションですが、その中で５演題だけは優秀演題ということで、口頭で発表していただきました。

また、中間評価報告ということで、近畿大学皮膚科教授の川田 暁先生に、「シミに対するハイドロキノン外用療法」のお話をいただきました。

企業共催に関しましては多くの演題をいただきましたが、スキンケアの最新の知見、新しいレーザーや光治療機器の紹介、あるいは注入療法に関しての講習会、実技セミナーを開催していただきました。ボツリヌス毒素療法のセッションでは主として顔の表情じわと重度の原発性腋か多汗症に関して、製剤の特性、局所の解剖、施術手技などを説明していただきました。

美容皮膚科学の目指すもの

今大会では、美容皮膚科学をまず最初に分子、細胞から眺め、次いで最新の臨床・実践を学びました。最後に皮膚の美容と心のかかわりということで、多くのエキスパートとともに大会を進行させていただきました。

美容皮膚科学の今後の役目としては、当然エビデンスに基づく美容医療を目的とした皮膚科学の構築だと思います。医師としてはエビデンスを重視した、サイエンスとしての美容皮膚科学を展開することが重要で、当然、しっかりとした基礎研究や臨床研究が大事でしょう。

美容関連企業に関しては、根拠がある美容医療を目指した機能化粧品、レーザーなど機器の開発、産学共同研究がますます大切になってきます。これからも医師と企業がタッグを組むことによって、社会のニーズに応えて、安心、安全、有効な美容皮膚科医療を展開

できればと思っております。

さらに、治療や施術後に、若さ、美しさを保つことが必要です。すなわち、心のケアやサプリを含めた内からの美容、ひいては顧客満足度を高めるようなことに関しては、医師以外のスタッフの役目も大きいかと思います。

今回の学術大会が、参加者全ての今後の美容皮膚科診療、研究に役立つ、そして前述の目的達成のための一助になれば幸いです。